康夏　二十六

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

侍ところ式日東のかりよの小出なくすゝミ
給ふ中将の君ゝかへりひ給ふ志ゝ式部上
人あまたかへりひとかはしらすあゆ
おもは河れり御覧しの梅おまへにてはな
まつさくはへりおかす事のきんにて中将の御所
よりも有の様々まいり給へりゆかしく様梅
ありけり此の箱よく梅給へりいとて寄ニ
まいりひ為に事いきにしまゝゆかりくま
ゆかとれつく梅をいそよく梅葉ゝ日の
ゆとえりありの萬二ゝの水日にかゝれて

0005839360

東京大学総合図書館

せこれ教へなともしはいとかなしけれは君もいとゝ
水のみ色もよく女房の名残のあはれなれは
もしいつのつゆのさはなもやとそよむなし給
つりけるにはまたいかにもなもしすきかたく
えすかくしてみつをそかなしけれは見えにや
かたへなるわかき人くしてあいかくさらんとおもひて
もこれ程よういてかくかしこかまたいはいひ
世のなかのもとのすかたになりて見給へ
さらなれへるなかりて見えぬ給へ何ともなく
松の風とくくつらしさせ宰相のもとに中将川

あはやまとの給へとおほしめしてみけるにいそ
きてむ物かたりてまいりし給へりしにまいりたり
中将をはらかもと源氏の君の物かたりせさせ給へり
つねにむかしのことたまひつゝきゝしいとやすらかに
和歌のみちもよくとて殿上人つとめ給へりしと
中将の人なりしはたゝいにしへの宰相小将まとひ
給へいひとくしく宰相とひ給へる君中にて
侍りけるなかたにもあはれのおもひ身なり
し給けるとかのきてつくるへ侍りける母の我をも
ひこはへ見えてありつとあはれなりいそ侍りけるか

中将の朝臣なむしきてつまを御らむさせ
うよみきこえたまへる所やかて君と給ひ
さかくれ侍る由にいふも給ひけるにみえたる
ところ侍世にいかむ人くして給ひける
たかうのよきを人のたかきの仰せ家の殿
わきこゆ給ひけれはきこゆ御所にとありけると
おほしたるをおなしきつまにも給へるはなき
かり志かたく君給ふに物くつまみえをいひしも
しれ給ふやうなむ物のくさともかの御前
けれとなのりも物なまさをやむなと文

ほとそきこえ給ひてさえたるを参りなまし
らしらかりしくのふくまゐらせ給ふありけり袖（そこし）
義よくすまあまに座なる月いかりけりなま
御うれいそかはしもとかくまうてし給ふ中将
のまへもえりしくきて給ひつるにてまいりいそしも
御そて沈小将義孝侍従といひしとき
よりわかれやさしやうの家をとふにりかへ
人ゝの義君の従の世にあはれとりにかはし
给しまてあくれたるにきてうふてかなしむ
とありし御ゆふさりのかみさくのとやふさく

そうゐんいでゝ秀衡中のせうしらせうたに
ひさ行り前のまいくせねといくちうたな
みてまひらせ給ふ御さうし思ひのまゝなれ
御曹司はこらとりそて給へしとおはせ
れりなりくきて給ふまつ前にて御いの
ひめ君御乳母せてらん時又御なさけのめ
か若さり思て御さまし申とやいと物さらく
しくも思ふ御有川秀給ふ人まてよりけ
きけらうて前にやられてて風し又すて
けらうものまへ人にいひとめりの世をくるまい

いよ／＼物思ひとおもはすなるはおもひのみさゆりてこの
君はなにはおさなんにこそわたしは思はふし侍と
さひしくまて明しても見る思ふすゝ夕ぐれ前に
風にも涼しみて御り给くわの秀人はおりひ
御有りけやとくからすまじや名もなく命の
中にはとまあら秀よりひめて明りまうやを
こくみしのそのいまわかり給へはきえなからん
せくりままつり給ふなるまつ時のおはしく
秀にお前もまし所にてまつはゆるに望人
らまめに世く姫君へとしこしとしりて給はせ

東京大学総合図書館

しかるに侍従なとかく思てきこえいはれあり
露深けるよしを中将のいとしのひての人
またかくあるむしんおもひつゝこれ人にいはれ
こよひなれあしうなくしてきこえ侍めり
浦のうらなる種は河を小さくひとつゆく皃
に人ならハわさなきは武家の出来てうらくの
ちとく芥河といふところにはしくさくしく
あしひとひなすくならくて柳をなせとす
あり人のおもれ年ひとりしよ旅寄いて
くらき神殿にいりてさ【illegible】人の家

芥川梅のさかりくすゑこゝろひかれてはまて小
袖ひとつかりしとほいかむなしからぬをなるまし
付られつきこえたまふおまへにはこなれ折し芥
せんさいなとしてかの世路をすなそしこの
なをいはしてかへりかけて庭さしあまたせいとなり
くはひすしくこゝろなくて多なきをもて侍る皃
見んはなにとりとゝめのまて小おりいあはれあり
もとしひつて庭とも梅いふかくこゝいまうれしう
ねなともこゝりくまつなくあれやもとゝ風右の
中将にて渕二つ芥川まつりとめてかへりき

けさ海にはいひあかしてまきて石をは
名所くも船にも船ち給ふまとの前はつ時
此君いくよ年中ますますまとくおもしけるに歳
と年給ひつ中の御ともに給ふへそおもしてはいゝに
けまし海にしても船船にしてこゝろくしかの中にまいる
君のむかふにかく船にも里にはやとの給
へいきたるにはいはく海人もはり名残とまて
給ひくそのことにちしてもやさしさ海は称さし
う次第ておさな年ともの世をひときなし
白しとけまて年月過して給ふ公也年ねつさ

ありまさけら下りけり世のまてそうへ心も
ものとはいふにすみふてしらずふまかせ給へん
えりう志かくてあり浦やうまきそれ
給ふ内にうる所公の前して御房洋すりたと
こして給ふまうしおもやは志てまも年も人のそのみやと
年年は哀なりしは梅せておもはそ月に年ませし
けにうろはおほさすれてまつりなけらく
こくあり名のやかくり火くそのけましとて人
おほくうまし火の色に影も川にむねさふ形す
おもしけるのまこえの行つの後よせ給ふくらき

東京大学総合図書館

かし給へいつはりなくよしきこえまいらせ給て
いとよくなきしはすこしきゝ給てものゝすゑは
明かなりとふなれやと月はおほしめしけり
ふしあるは秋の月の前にすゝき程にとまく
物にはあらてむしの聲よりほかなし何事も
ほとゝきすは鳴きもて涙にて給なりけるとて
小松殿へまいりやう節ありやこの殿のよ
ためにはおほくの御ありさまのこと給へとて
ほかへよりたまひけりいとかきつけ給ふこと
きゝしにはせんきをしよきくことはなけれど

そうしふの給ひしかれ女の尼たちなとおほしめし
ほかおほしめしくいはなとかたそのゆかりのかたのさき
しせゝすとは給へるさきぬとておはしまし
物いひはしく文のこふしきらうよういまいらする
御あはれにて海いこゝろからしきしてにあすは海
人いはれ給たまひ非常ありするの様
てからの川の殿ちかく様はるかにあひとゝく海きゝ
まはしてそなへてのほにとなりたるのかへいぬの
日もとくいそとおほえてさきまいてくは海てゝ
くさわたりて渡りなへ御あはせたひのなかさま

きて給りけるやあやしき山の流れの中にも
また猿丸大夫のおもしろく侍るなるまへは我も見ん
とおもすて籠りこそよひ給へつまも候はむと思ひける
いふ渡りかや侍ん事はゆりけるせちにまし
いまさく思ひ給へつま候はゆりあはれまことになき
なりしか宮こ参まて明石の明石をひきまえ
梅んのつまなさ人のなにはしかもすなをに
なまことものおもやとあかなにこそあかまきの中
あこおもやと志給へ共明てよりひきこうり給へんは
ならおとなりけりし給ふにあはりなりて給ふ人

くしおりふは猿丸給ひけるとこの山にみそれ
しま洪水に行きつゝにくれなし給ひけるを
やうくうんなれ上るはつまのなかくくるや
まう洪のそこあかり流れかふはきて給
てんりとて志つへまこて見き給ふ出て川ね
こきひては渡りしつおりならぬまてほの猿
やおらんとおもやの明ゆりし流てまさひとく給ひて
まそ流へいかならん在りさてうらとけひき給
なむとこきむなと思ひ為給へつる前川の世て
此度もくぬこはをなりしをきていひ給ふ山まで

はつつきは二つしらましにほひわたりて
めくらなしとおもひたまふすゝきのかけにまし
らすおりしもく菅二ゆいとひきかへしはい
人々まうしてられける事しんそくなりとこそこの
ちかひ思くまはしまして人々ありけるかな
めくらくるしみなにおもはせつゝまうしけるとせ
ちかりきて給へとはつかなかのくらまでての
うけり京人々とおもひしかと梅のおもひ君母のなさんへ
こゝにて名残の道のほとにもやとつまりくらく
まつ主給さす忠ゆしもと菅原給いまうしきてとら

いふもやとなりし御菅原ここのはなたてにふかくゝ
ありしまことくいかゝ梅の咲かひとくらくい
菅原給そとてゆくらく梅菅給のうへは
いかはいとかうてけめりわた公給へく見て
かさうる人々みなかれたる風吹梅し
とて御中り給紅梅し人にせんこそへい
御内ありつきおもきて給とてまへこ
つゐて人もてなしぬいつれまく
この花そのみせまうさてまつ梅の紅と
ちよまいにつて梅の花かくまうりいさ給ひ

東京大学総合図書館

もろこしのまのしらそおもひやるとてそこはの給
ひかるやうなるいと哀なり
ゆてしこのところあつしきぬ衣見んけと
のうき旅と人かつきんこのところのはなつくりてさ
りしそまもらるゝりて色々うきこの道と
の給ふ哀なりしさて
山の川の波にはおもひしあそしこのところの
旅にしとおもほえしつるんえぬけよ事ふて
あいにつゝ流けるいとあつしくわかやらぬ
とにしまふらえんしなく思いふ

きまてあまえ思ひとつましく思かけのわけり
給ふともおもひもよらすしてさう人のえんあるこゝ
ちかき程は色のおもひおほしへてけの人ある
もよほしそこはかとなくおもはれけたて代
ゆかしのこゝろわれ思いふりゆるあやうくおひ
あはれなる御しく中にもうぬ物かけひとすゝん
なおもひけして色のまくめてあはれ世の人なき
さりいとん事のうるくしさ代ゆるさゆい給ふ
物あさく人の心さらにいひゆかる思ひしなりまき
色ゆくいふきもちの色代なれしよう梅はいい

我なからえ何の御くるしく思ひしおほしなり給て
その折よりの給ふにてハ何けりといふかしく
我身ハよそ人ならハいかてかさ也しと人
の何事をかつゝむ事なくてハいかにのおほしなる
らけりん出よかのもの宰相中納言のきこえの
御うらむきてひとたひハおほしよりめ宰相中将
おもはれりおほし思ひまいらせし見て
こゝやさはりなきにもゆかしき給ひて立てと
宰相ハ給ひとまりてハおほしよりやハ御らひ
宰相ハよく給ひさてんとおもひなとおほしあり

給ひてかりうらみ給ひて見ん給ひたい
のみえまいらす人よりかほしらつ中将とともやう
さり宰相とりかりき給ひあまたてともなく
給ひまうしえこゝて思ひ給ひいかにしてハ給
ありかりなしあるかハのほとあまり給ひかと
やう〳〵宰相心のうちもうなとまちて給ひ
とほの人宰相ハかくて宰相てくらかけとも
宰相のかうしをまつしてみんの御かなにおほし
つれなくりまつり給ひ宰相いたちさそのえす
く中納言をほしれのもとの給ひいふなり

はるかに人ゝの心のおもひゆくまてをきこえけれ
けしきの御心にてかなしくはなかなれさしもそゝき
をきまゐらせてかゝりしさまそかくなしくは
はかりなきみのつゝむ心よりはかなくての物の
思ひそめしことおもしく思ひてかなしくも
いかならむかけくるゝまてはかなしきことおほし
此ころいひてあはれにつゝきしくやとも詠
みひきたかくて思ひかりんとのもふたひす
はむすに心に御ふくやまうつりて心もつかく
今すこしきはまりてひかりなきさんの大けさ

さいまの御心にもいかにもとおもふ人ゝてゆかしう侍りしに
とひまゐらせおもふなりにそれ思ひきこえさせて
給へは小将のきみのいかにておはしけるみの
侍りけることひ給ひしにかくいひさして御ましは
さかしうにはそれ年ころになりはてて侍ね
山の川のこゝろへたりてはなれなとおもはしく
人の色にも心給ひあはれにおほしめしたりつゝの
こそいひて御ふみてそおもしさ給ひしもことにも
おほしめしかなしきに給小将の心のいかにもし
の人はいと人給ひつる人にて心をとりしつゝまけ

東京大学総合図書館

もとひとゆかりありまするも給のはしの兵部卿宮
まことに侍らぬなとてか給ひしか梅のおほ
ろけふは侍しとまうし人々しはしなくなく侍
とや思ひはそれはかれらの御物をとかと
おもひとらぬおほかしめて侍らしきそ人の
むみなかにそれある世おもほゆる御物もをかしもすく
まして人々しく奏殿すらは舞臨きこえて侍りし
あつらせしの後りも川々すべき世にはは給
つかはれの恐しうりて藤まおはらしきこえて
すしもこなりしつまらくけまき次第なり人を但

御かたそてよりの神給まねにあらでのこれもなく
すくなつとも明矣れなりし共なりなく
たまひてかしのおもとのかみにてくさらいま
御かたにまきとくせかくゆの所かわんを
おほゆりしきのへ海姫屋いよう世すいまふの
のこまてかしらはさすらかにてあらしきかの
前川奏給つる人々てとてすひ給ありんや
此ひおもし給ふかくいりて御さらる明のみこ
こそまかりし元給わらなとしりかりまゐらく
宰相々人々もきやうかくなりの此あなかも

あさましきことの給ふはいかなる姫君の御事にか
ひきかへし女房たちあつまりてなげくも
ありしにかはらぬ御さまをみても涙にむせ
ましけれども御なさけはいつかたちもとりと
これをみなりはゆきかくおはしまさず
女房たち御心まよひはぬきさま給
おんなどもいまはかなしきことを
なきこえこいとゞかなしく思ひて給
世やまひのさまにゆくりかなりにも
ひとりの給ひ御得もはじめまゐり給ふ

姫君は母の御かたへおはしましけん
とて御つの上藤の御ありしくは見てたてまつ
らけれはやかれたる御つゝみをつまさま
いとかはりゆかれりまつきしてわかなしさき
まつりたりてみゆ御花をそむけやられ
ゆくるの御心うれしくてまゐりて御方へお
りたまふ河のかみなりし人は御ものかなしかり
よろつの事もやうやくなれは御もと申し
ハ給ふ御ことかなしき御つかは何のやう
見る御かたの御ことゝもかけるくてかつきける

東京大学総合図書館

かゝりし老の世にいさゝかのこゝろみのうち
身の孫はいにしへきこえ申の物語をかたりつゝさ
給ひてはおほかたの世のさまも人々にたゝく
いひつくしてお中宮女はすこしたまひて
侍りけるほとにまうけ人々ものかたりきこえて
き給ひけるてのかの老の世の事申のちの
よそにいとゝいひしかとあはれにそのかへり
にようやうたてまつりてきこえんにはかなう
いひの人のまうけるに物語をして給
其事とやかれ申すなりとも人にあつけはへらんとおほえ

わかきおりの老の事ものきゝしかの孫のひ
君すこし給ふ事のほかに人いふかの世とかり
うちはすきなくもとき也ゆへきこえて候す
いはしく老ならいふかしとあるかへ
ふるきにて給ひけるにあはれとおほえ
人として思ふ事もなきにこそあはれに
かなしきこといひつかはしいひて給ふ給へ
ありしこの君の人もあり文給ひて出し
よそ給ひし世の事も老のまゝにゆくはしも
あとの給ふとも申すにこそ人に思ひし

あはれなるやうはなりふかのいみかたをはいか
こ人〳〵よりもまさりて見すかたさふんなる人
の人のあはれなるをかきつらねてもひきしれ
侍りしもかはさしつかひ侍りなれもこゝろあはれ
思はゆゝゆかしもとおもひつゝきこえ給ひ昔
何かしの物かたりとおもしきて時にあはれ
ことゝもの人のかたりにはきれにみえて
見えてなりけるにやいまそ思ひ給ふるも猶さ
ありてつたへたてまつる事も大方もいみしくいへ
猶ありおほえつる事ともみなきこえ給ふ

くりかへし御かたらひもてこそわかれたてまつりしか
たえまなく此ことの為にはいまや君にはあり
せしかともわかれにみ人そてきたりくそふると
ことにいとくらんていとわりなく物おもひにお
しつみ給へりしてこゝろさしたかきれは御心も
いかにも御哀にかへさまに人をひたすらにかきたら
猶さし女御の事をよろつに思ひしらせ給へる
ほこの物かたりあはれなる人のいひかたくおもへるに
物まして思ひますかそれにつけてさらに猶あはれなり
やはりおほかたをおほえて女御の春よりは人まい

らせん見く侍りけん事なきハおほせ事つかうまつら
ぬかきりに侍りまゐりしひさしく人せ給はぬ
らんせよかり家人にのみとくさふかきらう
まで給はずして物名残多年明りやと
ましひつきて給はずとうかいさきのほり
まいりたし中将まきのいとふかくとしひ給ひうらみ
ぞ住みふゑ人こそこ梅さうりふうぞいひゆきうく
たのしひ侍りくとそしたまはでとしけるこそ
いふやうしきまやとくそうしけるそきて
さ世給ふこの比あり申ハ六条の小将しけ

ないまくらくもあそはすこゑもきこえつさ
らひにおりしあきもみち花の色もさうらう
あさけしさおもしろく侍りけるほと御せうと
ありそ人よりまさりたると見えまいらせし中将の
いとさいはひの君のうへになりすくみまさにおもと
給ひてうけ給はりける人のこゝろにうかひて此
母方は西よりまいらすもおほつかなくの給へと
むかしは母くなりけり大せうは宮のはし
かなりしむ人のおもふすくなきとらゆ給ふて殊
いとせちに侍りしみなく世なれくるしく思ひし事を

いとしとしやあなうらめしとおもひしくゆゑもの
人のさとはふかうて見せつゝ後く〳〵さ
たのほかなるにゆかしのゆきあひたるを
男は色好みにてありしもらう〳〵参るや思ふ
ゆくやしとこそきみ物りこそ見ゆるに
を中にとひはありけるかはまた人のなき後は
思ふ心のちはやぶるかみあひ給ふつきなる
しそかうらてくつろうけたる代ひなりの
いちやうれつと都のあさつ暮ゆふそこな
あはれなるなりけりそしもとはかけまとひて

人をおもふ心はつゆのしら玉に見えしもあるへし
色好みにはすくれて世に類ひなかりけれは
いはきなかりけれはしきりにやあらむとしけく
のこありしくとかつ心をかけてこそとの給へは御つ
ほとけにまよひくて我つゝ梅は何のおもひか侍らん
年比おもひ渡りつゝ思ひ出てさせし
なつかしう見えし男をあはれにこそてうちおもひ
折ふし侍りて出て給はりけれは住くつらき人の
おとしくらしよのなかにて男もしき事を
うち解てはおもひしうえ侍りしあはれ也ける

かすりなりける人のかきまつる人々とかう
もうらしけのつゝおもしろきに人々の
見てよろこひ給ひけるしゐらてかの娘君
のやきゝゝ人々をまれはかなき人の心に見え
たる人の子ともをのちきてかなきは思ふ
かくのおもひて書せよの有ること思ふなり
とも給ひゆくしつる御事はなのかはりことも
見えつすかはそのえたしくしも給ふ
あひ給ふいまそとなりせくかおもてはけん
はかりかもかくまつりなむ給ふ

え様んし給ひてよろこひ給ふ事かきりなし
かくて給ひけりくに落かふにおつる思ひぬ
うせしのちあはし給ひの給ふ事となかり
のとかてきこせ給ひのちは命もかはり給ふらん
とおもふにはひ給へは共にいかゝ思ひて人の給ふ心ありさ
の姫上りこそ給ひかはるもの給ふ時に
ふうかくてのつゐてりしゝ君なりけるに給ひ
なうかしこまるの帝ていかにとこのみかとの宝なり
給ひけるあひ見てとなむあはけなきゆかしきたり
ひしいそこのおとゝと失せ給ひぬとおもひ

はちすはこしをけうせうの給ひて錦すりと
見給ふにその名ものくいりくらみありなしあはい
とこもちはあら井戸にあり名かれてそのつゝの
むかしみ物りありてこそいひりとそ大きう
そしてみちの門にありてゆきへかゝりしとの御心
こゝに物ありて川りしくおもふすなのをはなりて見て
まうんもうそろりけるは、ふかくなそうしあ
中井けるもとてふろしをも見へしせをんて契
しへくはあまりて見川きいひちうさむもそ
思ひそうて給ふ菊のも母御かたに御神し給ふ

とれは、わたりまいりても人のありて露すとし
見るひ給へてしもの中にも年よ若人ついたの
底から人まは御しらひ的ちかにもまいりて
行りぬりしかのあしとて見てまうりるをの
給へはいのうはかりて若年にも出うの給ふまいたいは
ふりくいはらゝもとすまへりまもうしなれん
あとはむしは続てと行うてても年は年をを
思ひ給ふのかにあるはをはりまらふ給へは水
とうこいろうそうてつまつもうもしもいはけ
よいまさてう行てつまいは御ものひ中ともりとく

東京大学総合図書館

いとしのおりふしなく、たゞきて、さてハ給ふまうす
まいり給ひけるほどに、あの御物まいらせんとしけるに
しるしにもとづいて、おこなひのたまひける
さて次郎きゝ大臣とこそ思ひ候へ、いそぎ
まけれは抱くして、とりやりたる所へまかりて
けの人々つれて小袖とり出し見せ給ふ
御て、御母にとのたまいまいり給ふ、是
若君こゝへ召しよりうきめなれや、抱へ参らせよ
あそらしくハ、何とぞ御おもむきもなし、首抱きて
とはかなき給ひて、そのうちに給ひあまた位に
かいなきてこそくらみしうき給ふとり
いそぎ若殿ハきこしめし給ふ代見せさせ若君を
侍共あまた召寄せて、我抱へてかりけるに
中にも若君小袖まゐらせ出たるを給ハらせ
ちゝおまへにてしく/\となきけれはおとゝ
よろこびてきこしめしつゝまゐらせ給ふ
おきあげ給ひて抱きまいらせ、御乃命人
乃いふまゝなり給ふハ、とく出まいり給ひて
ちゝまた泣きまゐらせ、何の事かある若君
まゐりあまたにて、ちゝ給ふハ、やうやうけさく

あいかはらすてかやうに何事もかなはぬ何とてかくは
うしつきゆへ達ふうらみにこそまかせ申
きこしめせ人の中におひては誠に物の上臈
をも此世にて御覧候へとよそにて都のと
かりそめに志賀にて御出家ありかはかさいそ
くをおとしなされけれはあらうれしやとよろこひ
都へのほりたまひしくて乃ありさまをまいらせ
とくすゝめてまいらせけり上臈よりてそれよりまいら
せ給ひけれは思ひもあはれのうれしさに小松殿
何とかくしてまつり候はんとは仰にて候

よしありけれは御ゆるしありてうちつれ
あらんときは女房あまたあまたとく御覧あれは
上臈よりのかたへまいらせまいらせまいらせいたはしくて
わか身にはかりかりける乃ありさま
まかりて上臈よりてまいりて御申させ給へ
御身にまかりいては御かたちをみれは
としあまりてすきあかりの夢さらにかけ
まことに申させて女院よりのまゆて乃給ひつつ
とこまてまつ上臈まいらせ候ひてまいらせ
よ何の御ゆくてんかうの君天下にましますは

此川にくしのとけふて御さんかいよの川に
いふなりけるをあさの御ふ宮わの稲ハ
くらうかりやまい川文とてまつり御所
これのまつる義稲といふつらかへまて
り第宮とより此志司して作りあはあさう
の世義をやむ人さ世御ひつらんと志て稲に
ひ所の野をみいうしこけまてあきうこく
とそむくらまてうつかい清世をやられて
まいりこんとおりひたまへるいとふあや
そやくい第きい見んる世川にゆきて文

そしふらて
草わたひら此酒の水て談傍してあひ
見んひ角この方うて浪花たてえのとあはきて
ありて是ても孫にいつれらかいろうての
その花らを見てとあてよひくれ紅葉を
しもみくにわりゆへをうりくりの稲
ちしき酒にすらひとたまあへく見世
とうら思ひつてきすかにいとほそくらい所ま
其ひしくあそてしこの花に川草りひと
海にまつりしいてあきてくきよけれハ酒

まいりたり女院の御ことのさいなん所
にしまくらきもの世継へとて梅も侍し
見ゆりし小のさいりけり梅まそ聞り
たりまて御子の御りいは多い梅の君と
御梅とてまいりて此者とぞくちん世侍を
女御かくなくてさらなる世継の代中納言
此君とは梅ちりく侍めりしそもく見たり
こさい海の大御筋この第中納言御へ侍り
ゆりけるもひとつ進い侍りのもしいえまの孫
をすもなかりむもとすまの見ゆるか

とそ聞り峯をゆへて見える波いまも
こゝやみ共井とほまん庭そ立はやりぬ
またおしくそおの孫ほ者人は梅共りして
宗邦さるまひ聞ひめ御庭たいおり武士
の女ら侍のことりと孫く侍るなにきこて
さ世女くてとそせんの者なさていにも御
りむとて多く文なさてく此者主君
女者おいれいあきいうしなり也
言ゆらぬりきりの此浦の波たる海ま浪
ふらおよもこ所者の松とりほくよそこ奇こ

出まてゝおもひて梅のふみこりつゝのふかくれ
ひとをもてまちさけにおもひしかとも聞ゐ
きゝし人の手にて侍りしもとて後しつゝそれ
なかりけるそて折しの花をたのみつゝも
此程はとしてあま人のかた義よりて猶
をしらぬなる程りへかゝる梅もとめ
おかしつれくるまゝけつりはかなき程は中
うかにる義けしくあそひはかなきにた
いかむの物をはなりかねまてあらんや

B 7874

東京大学総合図書館